手巻きの心臓（前編）

みちすすき

○時計メーカー・組立作業室

組み立て途中の機械式腕時計のムーブメント。心臓部であるテンプがはめ込まれ、台座ごと軽く揺すられるとテンプが拍動し、時を刻み始める。
組み立てを行っていた深見吉彦（33）、それを優しく見つめる。
と、後輩の小林（23）に何か声を掛けられ振り向く。

×　　×　　×

腕時計を組み立てる小林。その隣でモニターに映し出される手元の拡大映像を見ながら吉彦が助言している。

○同・更衣室（夜）

コートを羽織って帰る支度をした吉彦。左手の薬指に指輪をはめる。

○深見家・佐保の部屋（夜）

一戸建ての二階。両脇の壁が本棚で埋まっている。窓辺の机に向かう吉彦の妻、深見佐保（27）。原稿用紙に鉛筆で文字を書き連ねていたが手を止め、ぼんやりと何か考え込み始める。
原稿用紙の脇には腕時計。
佐保、机に伏せて腕時計に耳を寄せる。チッチッチッチッという心地よい音が小さく響く。それを聞きながら目を閉じる。
そこへ別の音がかすかに混ざってくる。ゆったりとしたピアノの演奏。
目を開く佐保。

○同・リビングダイニング（夜）

入ってきた佐保。静かなクラシックが流れている。
コンポの前に座っていた吉彦、振り返り

吉　彦「ただいま」

佐　保「おかえり」

吉　彦「（部屋の匂いを嗅ぎ）パスタ？」

佐　保「（少し笑って）ハンバーグ」

×　　×　　×

向かい合って夕飯を食べる吉彦と佐保。

×　　×　　×

食後、吉彦がドリッパーでコーヒーを淹れる。佐保は照明を絞ったリビングで何か読んでいる。
吉彦、コーヒーを持ってリビングへ。佐保は手紙を読んでいた。テーブル上にはほかにも数通の手紙。

吉　彦「佐保」
と、手紙から離して佐保の分のコーヒーをテーブルに置く。

佐　保「（微笑み）ありがとう」
手紙のどの封筒にも『柳サホ先生へ』とある。
ソファに座り、コーヒーを飲む吉彦。
佐保はまた手紙を読み始めた。優しく、慈しむような眼差し。

○ショッピングモール・書店

吉彦、店頭で平積みの本を眺めている。ポップのついた『雪に沈む鼓動』という本に目が留まる。著者は『柳サホ』。
一人の客が『雪に沈む鼓動』を手に取り、店内へ。
それと入れ違いに、佐保が紙袋を持って店内から出てくる。

吉　彦「今、一冊売れたよ」
と、『雪に沈む鼓動』を見る。佐保、その視線の先に気づき

佐　保「ほんと？　見たかった（嬉しそうに笑う）」

○同・駐車場

吉彦の車に乗ろうとする吉彦と佐保。

女性の声「あらー、どうもぉ」
吉彦と佐保が振り向くと、近くに高齢女性の近藤がいた。
あ、と会釈する吉彦と佐保。

近　藤「最近佐保さん見なくてね、元気かしらーと思って、けど夜中でもよく部屋の電気ついてるから忙しいのねーとか」
佐保、ぎこちない愛想笑いで相槌を打つ。

○同・吉彦の車・内

運転席に吉彦、助手席に佐保が座る。
目を合わせる二人。吉彦、佐保の疲れた様子を見てくすっと笑う。

○山・展望台

『展望台』の表示板がある。ひっそりとして吉彦と佐保以外誰もいない。
眼下には街が広がり、遠くの切り立った山々には雪が積もっている。
雪山に見入る佐保。ひたむきな、澄んだ眼差し。
吉彦が佐保の顔にかかった髪の毛をそっと除けると、佐保が振り向く。

吉　彦「次に来られるのは、春だね」

佐保、柔らかく微笑む。

○ホテル・宴会場（別日）

カメラのフラッシュがバシャ、バシャと光る。
『今読む小説大賞授賞式』と掲げられた壇上に慣れない様子で佐保が立ち、フラッシュに目を伏せる。

○同・貸会場

記　者「では、主にお仕事は自宅で……」

佐保、硬い表情で記者から取材を受ける。カメラマンが写真をパシャパシャ撮ってくるのに、居心地が悪そうに体を縮こませる。

カメラマン「もう少し明るいお顔いいですか？」

カメラのほうを見ず、ぎこちなく笑う佐保。

×　　×　　×

取材の合間。疲れた様子の佐保に、編集者の園部（26）が

園　部「一度休憩、入れますか？」

佐　保「（にこっと笑い）ううん、大丈夫」

×　　×　　×

黒縁眼鏡の男性業界人が佐保と向かい合って座る。

佐　保「お待たせしてすみません」

業界人「いえ、こちらこそ急にお時間いただいて。小説家の先生だと、こういう長丁場慣れてないでしょ」

曖昧に笑う佐保。

×　　×　　×

佐　保「（渡された名刺を持ち）映画化……」

業界人「ま、詳しいことはこれから。ネットでも流行ってますし、当たりますよ」

佐　保「え？」

業界人「ご存じないですか？　Ourtubeでも感想の動画いっぱい上がってますよ」
　　驚き、呆然とする佐保。
業界人「女性作家特有の繊細さ、今の時代ウケますよ！」
　　×　　×　　×
園　部「あんまり小説を読まない人なんですかね」
　　取材が終わり、佐保と園部の二人だけ。
佐　保「え？」
園　部「さっきの人です……あ、出発、十分後で大丈夫ですか？」
佐　保「あ、はい、（腕時計を見て）大丈夫で……」
　　一瞬、動いていた秒針が止まったように見えて、言葉が切れる。
　　が、秒針はちゃんと動いている。ほっとする佐保。

○吉彦の車・内（夜）

　　助手席の佐保、黙って外を眺めている。運転する吉彦、それを見て
吉　彦「疲れた？」
佐　保「……（笑って）久しぶりだったから、ちょっと」
　　と、再び外を見る。雪がちらちらと舞い始めた。
吉　彦「昨日から降り始めたよ」
　　佐保、ぼんやりと雪を見上げる。

○深見家・佐保の部屋

　　机で原稿用紙に向かう佐保。書く手を止め、横に置いていたノートＰＣでネットブラウザを開く。
　　トップサイトのニュース欄に『著名人も絶賛！　今読む小説大賞』という見出し。気づいた佐保、見出しを見つめ、そっとクリックして開く。
　　タレントやアイドルが『雪に沈む鼓動』を持った写真が何枚も現れる。みなどこか誇らしげで、『ＳＮＳでも話題』と書かれている。
　　佐保の顔が不安そうに強張る。
　　動画サイトを開いた佐保。検索欄に『雪に』と入力すると予測変換で『雪に沈む鼓動』が、さらにその下に『ネタバレ』『解説』等が付属した検索候補が表示される。一番上の『雪に沈む鼓動』をクリックする。
　　動画がずらっと表示される。どれもサムネイルに大きく派手な文字で『感動』『涙腺崩壊』『徹底解説』など書かれている。
　　佐保、そのうちの一つの動画をそっと開く。

と、女性配信者Ａがうるさく声を張り上げながら
配信者Ａ「もうね、ほんっとヤバい！　まぁじで感動するから！　なんかね、心の奥の琴線に？　触れるっていうかぁ――」
慌てて『戻る』ボタンを押し動画を閉じる佐保。
ショックを受けたように少し固まった後、別の動画をクリックする。
配信者Ｂ「え、みんなわかった？　あそこでこまりが出ていった理由。作者ははっきりと書いてないけど、あれ実は過去の匂わせで……」
タイトルに『衝撃の事実！』と入った動画で、中年男性配信者Ｂが驕慢な口ぶりで語る。佐保、唖然として画面を見る。
下にスクロールすると『そう、実は裏設定で……』『一般人はわかってない』『さすがの考察』等のコメントが並ぶ。
思わずネットブラウザを消す佐保。苦しげに俯き、額に手を当てる。

○佐保の車・内（別日）

街中を運転する佐保。カーナビからバラエティ番組の音声が聞こえる。
女性タレントＣの声「あーそうなんですね、私、ちょっと違うふうに読んでました」
赤信号で車が止まり、番組の映像が映る。スタジオに『雪に沈む鼓動』が置かれている。女性タレントＤが高圧的に
女性タレントＤ「あれはね、嫉妬なの。若い子ってそうでしょ？　そういう常識、十代の心理を前提にね、こういう文学は読むの。でないと――」
映像が子供向け番組に切り替わる。佐保がチャンネルを変えていた。
その目は悲しそうに宙を見つめている。

○深見家・駐車場

車からスーパーの購入品を下ろす佐保。そこへ近藤が寄ってきて
近　藤「ちょっと佐保さん！　見たよー、すごいじゃない！　なんだっけ、あのなんとかっていう賞」
佐保、目を合わせずきまずそうに笑う。
近　藤「私も読んじゃおうかな。あ、サインお願いしちゃったりして！　知り合いに話すたび、みんなびっくりしてねー」

○同・リビングダイニング（夜）

食事をとる吉彦と佐保。吉彦、疲れた様子の佐保を見て

吉　彦「大丈夫？」
佐保がぼうっと吉彦を見る。
吉　彦「なんか、結構色んなところで、盛り上がってるなって」
佐保、一間置いてから微笑み
佐　保「予想外で、びっくりはしてる。たくさんの人が、注目してくれてて……
（俯き、小さな声で）ありがたいこと、だよね」

○同・佐保の部屋（夜）

机で原稿用紙に向かう佐保、暗い顔でぼんやりしている。
脇に置いた腕時計を見る。淀みなく動く秒針。
それが突然、ぴた、と止まる。
どきっとする佐保。リューズを巻くが秒針は動かない。
佐保が呆然としていると、唐突に秒針が動き出す。
ほっとする佐保。だがどこか不安げに時計を見る。

○時計メーカー・組立作業室

モニターにテンプとそれをいじるピンセットが映っている。
吉彦が顕微鏡を覗きながら作業し、隣で小林がモニターを見ている。
吉　彦「テンプはまさに、機械式腕時計の心臓部だ。ここの調整が時計の精度に直結するし」
真剣に顕微鏡を覗く吉彦の目。
吉　彦「ここが狂えば、時計が狂う」

○同・休憩室

スマホでニュースを見る吉彦。佐保の写真が添えられた『美人受賞作家の素顔』という週刊誌の記事を見つけ、険しい顔に。

○佐保の心象イメージ

暗い空間で、目元の見えない人影たちが塊になって話している。
人影１の声「これまじ？　正直引いた」
人影２の声「いやこれ相手の問題じゃん。よく読めよ」
人影３の声「売れる人ってやることやってんだね……」

その視線の先には佐保がいる。佐保、気味が悪そうにその場を離れ、目につい た扉の中に逃げ込む。
するとそこはレストランのような空間。
人影４の声「はあい、次は雪に沈む鼓動ですよー」
フルコースの料理が出てきて、全て大きなミキサーの中へ投入される。
ミキサーの脇にいた人影４がスパイスを雑に振り入れ、スイッチを押す。
料理は混ざり、ぐちゃぐちゃの塊に。それが皿に小分けにされると周りの人影たちがこぞって食べ出し、満足そうに笑う。
佐保、気分が悪そうに口元を押え、その場から逃げる。
人影５の声「（笑って）え、これ読んでないとかニワカじゃん」
テーブルで人影たちが『柳サホ』のメニューを見ている。
人影６「うるせーな、通ぶんな」
と、人影５と殴り合いの喧嘩を始める。気づくとあちこちで取っ組み合いが起きている。さらに逃げていく佐保。
その先で、テーブルに着き料理を食べる人影たちがいる。
人影７「てか、よはるなんであそこで変な責任感出したの？」
と、フォークに刺した料理を、見ないまま振り捨てる。
人影８「（料理を食べずに皿を舐めて）つまりあれはこまりの性的衝動で」
人影９「（フォークに刺した料理を凝視し）これって作者の深層心理だよね」
恐ろしげにその光景を見る佐保。
人影７「（また料理を捨てながら）え、てかこまりがはっきり言えば解決じゃんね」
人影８「（フォークを舐めながら）よはるはさあ、寂しい子なんだよ」
人影９「（料理を手づかみして）てかこれ、作者の実体験でしょ」
佐保、慄くように身をすくめ、後ずさる。
と、向こうのほうで青い封筒がひらりと落ちてくるのが見える。
そこへ駆け寄り、必死に封筒をつかみ取る佐保。『柳サホ様へ』とある。
ほっとしたように息をつく佐保。中から便箋を出し、読む。
が、佐保の顔がだんだんと曇っていく。
手紙を読む声「（明るく）こうゆうわかりにくいキャラは、もっとはっきり……あ
あゆう展開は良くないと……このほうが人気になると思います！」

○深見家・佐保の部屋

青い封筒を脇に置き、机で便箋を読む佐保。その目に力はない。
ゆっくりと、机の上に崩れ落ちていく。
窓の外では雪がしんしんと降っている。

○同・台所

とんとんとん、と包丁で野菜を切る佐保。虚ろな目で手元を見ている。
その視線が、次第に野菜を押さえる手の指に注がれる。
じっと自分の指を見下ろす、佐保の暗い目。
とんとんとん、と軽やかな音は続く。
が、その音が急に途切れる。佐保が包丁を置き、片手を押さえる。
野菜に添えていた指から血が流れている。
佐保、痛がる様子もなく、ただ無表情に手を押さえている。

○同・リビングダイニング～台所（夜）

向かい合って食事をとる吉彦と佐保。

吉　彦「（佐保のほうを見て）指、どうかした？」
佐保の指に絆創膏が巻かれている。

佐　保「……野菜切ってて、ちょっと」

吉　彦「包丁で？」

佐　保「うん、でも軽くだし、大丈夫」

吉　彦「そう……（佐保の様子を気にしつつ）そういえば、駅前にピザのお店できてたね。今度行ってみる？」

佐　保「（目を合わせず）……締め切りで、しばらく無理かも」

吉　彦「そっか……あ、俺もこれから帰り、ちょっと遅くなるかも。生産数増えるスケジュールで……」
佐保、聞こえていないかのようにぼんやりしている。

×　　×　　×

台所の流し前で、佐保から洗う食器を受け取る吉彦。
食器を置き、絆創膏を巻いた佐保の手を取り何か言おうとするが

佐　保「今日はコーヒー、大丈夫だから」
と、吉彦の手から自分の手を抜き去り、部屋を出ていく。
吉彦、閉まった扉を心配そうに見つめる。

○同・佐保の部屋前（夜）

コーヒーを持って来た吉彦。扉をノックしようと構える。
が、そのまま固まって俯き、やがて手を下ろす。

吉彦、静かに部屋の前から去っていく。

○同・佐保の部屋（夜）

机に伏せ、腕時計の音を聞く佐保。
顔は開け放った窓に向けられ、外で降る雪をじっと見ている。
光のない目。

○ショッピングモール・書店

生気のない顔でふらふらと歩く佐保。
店頭に並んだ新刊本の前で立ち止まり、何気なく眺める。
ある小説の帯に目が留まる。『真っ白な世界で、出会ったのはあなたでした』という文句が書かれている。
その本を手に取り、裏のあらすじを読む佐保。顔が強張っていく。

○深見家・佐保の部屋

スマホを見る佐保。画面にはＳＮＳの色んな人のポストが並んでいる。
『これ某小説のパクｒ……？』『見たことある設定ダナー』『リスペクトっていうんですよ』等のコメント。
書店で手に取った小説が机上にある。佐保、それを暗い目で見下ろす。

×　　×　　×

園部の声「はい、私も読みました」
佐保、スマホで園部と通話している。
園部の声「編集部で対応等含めて確認しますね」
佐　保「（弱々しい声で）……お願いします」
園部の声「（少し間を置き）……先生、大丈夫ですか？」
佐　保「はい。締め切り、遅れててすみませんが……」
園部の声「いえ……（何か言いたそうにするが言わず）じゃあ、失礼します」

○同・リビングダイニング（夜）

リビングの窓から庭を見る佐保。台所の明かりだけをつけ、リビングは暗い。外は強い風の中を雪が舞っている。
玄関のほうでバタン、と音がし、やがて吉彦が入ってくる。

暗い中に立つ佐保に気づき、どきりとする吉彦。
佐　保「（振り向き）おかえり……雪、大変だったね」
吉　彦「あ、うん」
佐保は台所に向かい、何事もない様子で食事の準備をし始める。
吉彦、ジャケットを脱ぎながら、気にするように佐保を見る。

○道

こんこんと降り続く雪。
まっさらな雪が降り積もった田んぼに囲まれ、人も車もいない中を佐保は一人、歩く。スマホで通話している。
佐　保「あの、園部さんは」
編集長の声「説明のために、編集長である自分からお伝えさせてもらいます」
相手は編集長の男性。
編集長の声「結論から言いまして、うちでは法的な対応などは一切考えてません」
佐保が足を止める。
編集長の声「確かに類似点が多いですし、柳先生の作品を真似ているかといえば、まあ、明らかにそうだと思います」
佐保の口から白い息が漏れる。
編集長の声「しかしですね、著作権侵害の実証って難しいんですよ。明らかにそうだろうっていうのでも、実際に裁判で認められるかはまた別でして……」
虚ろな目でそれを聞く佐保。
編集長の声「（笑って）まあ、それだけ話題性があるってことですよ」
佐保、ショックで目を見張る。
通話を終え、スマホを持つ手をだらんと下げる。
その体に雪が降り積もっていく。
一面真っ白で静かな世界で、佐保はぽつんと立っている。

○時計メーカー・組立作業室

ぱき、というほんのかすかな音。
小林の声「あ」
顕微鏡から顔を上げ、小林が固まる。
その隣で吉彦が、小林の手元を映したモニターを見ている。テンプの中央に巻かれた小さなぜんまいが折れている。
小　林「すみません、やっちゃいました」

吉　彦「（笑って）いいよ、練習だから」

だが何か嫌な予感がしたかのように、吉彦の顔から笑みが消える。

前編終